

① 刑法 175 条 / Paragraph 175

13:00~14:25



【監督のこぼし】 ロブ・エプスタイン&ジェフリー・フリードマン

アメリカユダヤ委員会が1993年に行った調査によれば、ナチスが同性愛男性を見分けるための印としてピンクトライアングルを着けさせていたということはおろか、ナチス政権のもとでゲイが弾圧されていたことすら、知っているのはイギリスでは成人の約半数、アメリカではわずか4分の1だという。『刑法175条』では、これまで映画で扱われたことがなく、歴史の本ですらめったに言及しようとしなかった歴史に斬り込んでいった。何万人もの人々が迫害され殺害されたというのに、なぜ記録から抹殺され続けてきたのか？

私たちがこの問題に関心をいだいたのは、まずは私たち自身がゲイ男性でありユダヤ人でもあるから。私たちにとって、当時についての証言ができる人たちが生きている間にできる限りの記録を残しておくことは、切迫した必要性のあることだった。また、映画作家の立場からいえば、このテーマの曖昧さに魅かれた。虐待される同性愛者、同性愛のレジスタンス闘士、同性愛のナチス及びシンパが同時に存在していたのだ。また、ナチスは一貫して同性愛者を迫害していたが、一方で敵陣からは、ひとりのナチス高官が同性愛者であることを理由にナチス全体が同性愛の巣窟だというプロパガンダを流されてもいたのである。

ナチスの迫害から逃れたゲイはかなりの数にのぼったが、彼らはどうやって生き延びたのだろうか？英雄と悪人の境目は何なのか？そして、どうして私たちは人間の経験にグレーゾーンがあることに不安になるのだろうか？

② おばけのマリコローズ / Mariko Rose the Spook

14:40~16:00



ゆうばり国際ファンタスティック映画祭2010 ファンタランド大賞イベント部門 受賞
ひろしま映像展2010 グランプリ・演技賞 受賞

小林でび監督よりメッセージをいただきました。

2年ぶりです！青森のみなさま、お元気でいらっしゃいましたか？

一昨年『セレブ寿司』という作品をこの映画祭で上映していただいた時、僕は秘かに誓ったんです。「よし、新作の Comedy 映画を撮ってココに戻って来よう！」それが実現して今、すごく嬉しいのです。しかも戻ってきてみたら、今年の青森インターナショナルLGBTフィルムフェスティバルは、映画館でのプレ上映があったりとか、なんだかパワーアップしてんじゃないですか！素敵すぎます。素敵なムーブメントです。

今回、僕が持ってきた新作『おばけのマリコローズ』は“恋愛の映画”です。「好き」という感情を自分自身でコントロールする事が出来ずに、好きな相手の前で右往左往してしまう話です。恋愛って素敵、でも苦しい。そんな時、ついバカな行動しちゃいませんか？僕はしちゃいます。で、家に帰ってから「ああああ」とか呻くんです。不思議です。でもそんなこんなも含めて恋愛って、人生って素敵だと思うんです。この映画のマリコローズっていう幽霊なんて、死んだ後もそんなこと繰り返してるんだから…あはは。

単純に楽しんでいただきたくて、この『おばけのマリコローズ』を撮りました。「ほかーん」と観ていただけたら、そして「ほんわか」していただけたら最高です。

僕たぶん、映画祭会場あたりをウロウロしてると思うんで、みなさん、見つけたら気軽に声をかけてください。ではでは、楽しい映画祭を。

小林でび



③ ミウの歌 ~Love of Siam~ / Love of Siam

16:15~18:55



【タイ】 2007年度スパンナホン映画大賞 作品賞・監督賞・助演女優賞 受賞
2007年度バンコク映画評論家連盟映画大賞 作品賞・監督賞・主演女優賞・助演女優賞・脚本賞・音楽賞 受賞
2007年度スター・エンターテインメント大賞 作品賞・監督賞・主演女優賞・助演女優賞・脚本賞・音楽賞 受賞

【ブラジル】 第16回FESTIVAL MIX BRASIL Audience Award 受賞

【日本】 大阪アジア映画祭2009 観客賞 受賞

2007年に一大センセーションを巻き起こしたヒット作が日本で2009年6月、ついに劇場公開された。タイではアクションやホラーがヒットする中で<ドラマ>は流行らないといわれた。そんな中、タイ映画界の新星チューキアット・サクウィーラクン監督が、学生時代から4年の歳月をかけ構想したこの作品は製作会社から期待されていなかった為、高額予算をかけずに制作された。有名な俳優を主演に迎えず、ほぼ新人を起用。主人公のミウ役のピッチに関しては監督の学生時代の後輩で全くの素人だったのだ。

しかし、「ミウの歌 ~Love of Siam~」は本国タイでの劇場公開後、口コミで評判が広がり、若者から年配の方までに感動の嵐を巻き起こし、作品や出演者、そして監督を含め高い評価を得た。『正直、ここまでの大きな話題となるとは予想していなかった』と監督は当時を振り返る。監督はまだ20代というその瑞々しい感覚で、監督、脚本、そして、映画挿入歌のほとんどを作曲し、映画もオリジナル・サウンド・トラックも大ヒットしたのだ。オリジナル・サウンド・トラックはタイ国内のCDショップでは売り切れて手に入らないことも話題になった。感動の熱は今でも冷めやらず、タイ国内ファンだけでなくアジア各国、アメリカなどの海外まで広がっている。

©sahamongkol film international